調査研究の蓄積があるとはいえ，これだけのものを作った Shorto 氏の語学力と綿密さにはこれまた驚嘆するのである。

もちろん細かい点では疑問と感ずるところがないわけではない。たとえば派生関係の説明にしても，pəlɔt（文語*kamlat*）≪thief≫を labial form of klɔt（文語klat）≪to steal≫とするように文語の綴字にかかわらず口語形式どうしの関係として説明しているのだが，何か共時態と通時態がごっちゃになっているような気がする。著者は本書を，その冒頭で，現代ビルマ・モン語の「記述」の一部とよんでいるけれども，上のような点も含めて全体に，たとえば，Haas：*Thai English Student's Dictionary*（1964）に見るような記述言語学的なまとまりはない。

ともあれ，これが本書の著者をはじめロンドンの学者たちの東南アジア語研究の水準を示すものとすれば，続刊を予定されているらしいモン語の文法書もさることながら，パラウン語・ワ語などすでに現地調査した諸言語についてのくわしい報告をも是非とも期待したいものである。（三谷恭之）

Tatuo Kira & Tadao Umesao (eds.): *Nature and Life in Southeast Asia IV*. Fauna & Flora Research Society, Kyoto, 1965. Vii＋402 P.

大阪市立大を中心とする東南アジア，主としてタイ・マレーの調査報告の第4巻である。前回に引きつづき，自然科学と人文科学の両面における多彩な研究結果が発表されていて，日本の学界の東南アジア研究も，いよいよ軌道にのってきたという感じが深い。標題を追ってゆくと，

日本・タイ協同生物調査隊（1961-2）の行動
　岩田慶治，
タイ国における森林の3つの主要型の研究
（I）森林の構造及び構成植物
　小川房人，依田恭二，吉良竜夫，荻野和彦，四手井綱英，ドンケオ・ラタナウォン，チャーン・アパスット
（II）植物の量的関係
　小川房人，依田恭二，荻野和彦，吉良竜夫，
北部タイの少数民族社会の栽培植物
　松岡通夫，吉良竜夫
東南アジア採収の有蓋陸産貝類
　波部忠重
タイのマンジュウダニ（I）
　青木淳一
東南アジアの原尾目
　今立源太良
中部タイにおける土壌内小形節足動物の季節変化
　荻野和彦，パイラート・サイチュア，今立源太良，
南ベトナムの蝶
　井上貞信，川副直人
東南アジアの北部地方における礼拝典儀
　岩田慶治

報文の内容は，それぞれの分野において専門的の立場から批判され，検討されるであろうが，全体を通じての感想は，この第4巻が今までの報告のうちで最も充実しており，市大の調査報告の中核であるかのように思われる。その報文も第1巻においては個々の散発的のものが多かった観があるが，おいおいにそれが集約的のものとなり，そのひとつひとつが，その分野における重要文献になりつつあることが認められる。

種種困難な事情のつきまとうこのような海外の学術調査の実情は充分に察しられるけれども，せっかくここまで生長してきた研究グループの活動であるから，それをさらに発展させて，日本における東南アジア研究のひとつのパターンを確立されることを望むこと切なるものがある。調査の中核となった大阪市大関係者，ならびに編集者の努力に深甚の敬意を表するしだいである。（吉井良三）